



第21回

半世紀をこえた「東洋文庫」との縁

遠い異国への眼差しと、眼下の家庭と人生と



土肥祐子
東洋文庫研究員

卒業論文で使った思い出深い、手抄本
『宋会要輯稿』巻128食貨38「市舶」を手に

中国南海貿易史をご専門とする土肥祐子先生にお話をうかがいました。土肥先生は、大学の学部時代より現在に至るまで「東洋文庫」と浅からぬご縁があります。今回は、特に一人の女性として「就職」「結婚」「出産」「育児」という人生を歩みながら、どのようにしてご研究を続けてこられたのか、また、その時々で東洋文庫はどのような存在だったのかを語っていただきます。

(インタビュアー…中村威也・谷家章子)

戦争の時代・少女のころから、戦後の時代・東京の大学生のころまで

私が生まれたのは鳥取県。父が内務省に勤めていた関係で、大阪、神戸、松山と転々となりました。3、4歳のころ、神戸港の外国船をいつも見ていました。きれいな旗を沢山つけて神戸港をグルッとまわって警笛を鳴らして外海へ出ていく風景を覚えてます。どこに行くのだろうと思ったのが「海外貿易」に触れた、初めてだったのかもしれない。素早く手旗信号をする水兵さんもとにかくカッコよかったです！

松山の国民学校2年生のとき(昭和20年)に松山から母方の実家の福島に3日かけて疎開しました。その時、覚えているのは爆撃を受けてはぐれると困るので、母がお煎餅と水を持たせて「万が一の時にはこれを食べなさい」と言われました(笑)。何回も空襲のため

汽車から降ろされました。やっと着いた福島の家はお酒を造っていて、白米を食べてました。八月十五日に終戦となり、価値観が変わりました。学校に行けば教科書に墨塗りばかり。頭にはDDT。田植と稲刈りの時期には学校は休校。そんなこともあり、勉強に興味がなく、中学2年生まで山に海にと遊びまわりました。山では毒のある植物を、海では引き潮を、地引網では多くの魚、海藻を覚えました。身を守るためです。裸馬に乗ったのもこのころです(大人になり中国の山奥でロバに乗ったとき、上手ですなと言われました)。高校受験を迎え、慌てて勉強をして、地元の進学校に入りました。

福島で終戦を迎えました。福島へ疎開してから中学2年生までは遊びましたね、海や山で。裸馬に：鞍なんていう上等なものはないから：乗ったりしましたよ。勉強もせずに毎日毎日、ずーっと遊んでました。高校受験のときは、いわゆる地区一の進学校だったので、慌てて勉強して入りました。

中村(以下、略)…終戦からの激動の時代のなか、どうして歴史に興味を持ち史学科へ進学されたのですか？

高等学校の日本史の授業で、どうしてこうなるの？ってというのが、なんか分かったように思えたんです。たとえば正長の土一揆は、「一揆」なのに、馬借の力をかりてるから情報のカヤッチが早い者が先手を打つ、貧乏でないはずの馬借、問丸がどうして一揆に加わったのかなとか。ただ事実を教わるのではなくて、この条件とこの条件を加えるとこうなるとか、1たす1は2って数学を解くように、歴史をひとり解いていくのが好きでした。歴史に対するあの新鮮な感覚は、大人になった今の私にはもうないかと懐かしく思います。

す。それで、大学では室町時代（動と静）をやりたいとか思った気がします。本当は体育系に行きたかったんですけどね（笑）。

日本史を勉強して大学へ進学した土肥先生が、中国史を専攻するようになったのはどうしてでしょうか？

日本史専攻でしたが、2年生のとき、榎一雄先生の中央アジア史の授業を聴き、こんなに深いのだと感激しコロリと気持ちが変わって東洋史に変更しました（笑）。他の科目はサボっても、榎先生の授業は全部取りました。

授業で榎先生が「東洋文庫」とか「東洋学講座」とかおっしゃるので、東洋文庫を知りました。閲覧には紹介状が必要だったので「ラーマヤーナ」「マハーバーラタ」を研究すると書いて、榎先生に紹介状をお願いしました（笑）。はじめて聴いた東洋学講座は、梅原末治先生の「殷墟について」（昭和32年度東洋学講座・4回連続）でした。この講演は素晴らしかった。この講演をきっかけに講座を聴くようになりました。思い出すのは、榎先生が楼蘭王国について講演したとき、人が多くて途中から椅子を撤去して、みな立って聴きましたが、それでも入りきれなくなって廊下に人があふれておりました。東洋学講座は最後の榎先生のまとめ（要旨）が良いと松村潤先生も書いておられます。東洋文庫は寮から近かったこともあり、要旨にひかれて講座に通ってました。雰囲気が好きだったのでしよう。卒業論文では、すでに宋代の南海貿易をテーマに書かれていますよね？

本当は中央アジアでソグド人のことをやりたかったけれど、語学が難しく先行研究も少なく無理でした。海外貿易については『蒲寿庚の事蹟』があり、東洋文庫

の『宋会要輯稿』に「市舶」という部分があると教わったので、難しかったのですがそれを読んで、書きました。その時、榎先生から、宋代史に詳しい人がいるから、いろいろ教えてもらいなさいと紹介されたのが、今の文庫長の斯波義信先生でした。私は、斯波先生から宋代の史料のことを教えていただきました。静嘉堂にも紹介され『淳熙三山志』や文集を見に行ったりしました。そのころ斯波先生は「文集は全部読んでます」とおっしゃって、毎日文庫で机に向かって勉強しておられました。

この「市舶」について今も研究しておりますので触れさせてもらいます。(1)文庫の「食貨三八 市舶」（冒頭画像参照）とあるのは現在、世界でここしかない、貴重な資料です。(2)この手抄（藤田豊八写）の原本は故曾我部静雄氏が所有し、文庫にあるのはその副本です。(3)故柳田節子先生が訳注を試みましたが逝去され、現在、この本の訳注を2、3の人とすすめております。

東洋文庫の職員となったころ

地元の私立高校に就職しようと思いましたが、就職係の人が、東洋文庫の職員の公募が来ると言うので、慌てて試験を受けました。面接は岩井大慧先生でした。

何も知らない私を指導してくださったのが、池田温先生でした。榎先生の隣、敦煌研究室に配属されました。書庫から本を出す時、たとえば榎先生はドイツ語の頭文字をいうだけで、池田先生は「Young Pao」の何巻というだけです。排列が分からず、何度も足を運んで書庫の本を覚えました。そのころは、書庫の思い出が非常に強いです。何かあったら書庫に逃げ込みました。

『永楽大典』の記述を見つけたのも、「市舶」を読んだのも、「陀羅尼經」を見たのも書庫。あの頃は自由に見ることができました。書庫はいまでも資料の宝庫です。

他には「応援してください」と言われてあちこちの仕事を手伝いました。図書部が忙しいとき、数か月閲覧係もやりましたし、書籍の登録もやりました。時には総務の仕事も、やらなかったのはお金の勘定くらいです。人数が少なかったので下々のことはなんでもやらざるを得なかった。偉い先生は別にして、文庫の人の名前と顔はお互いにすべての人が知っておりました。そのはず、全員がお弁当はお茶があるので、食堂で一緒に食べて頂きました。昼休みは屋上で卓球を、後にバレーボールのコートを作ってやりました。創立記念日には、運動会もやりました。和気あいあいとした雰囲気でした。

配属された敦煌研究室では、敦煌文献を使った文献目録や文書の解説等を積極的に進めていました。そのため、研究会も仁井田陞先生、西嶋定生先生なども出席され、5時から8、9時頃までやっておりました。私はお茶出しやコピー取りで最後まで残っておりました。皆さん熱心でした。忙しかったのは榎先生が持つてこられた「敦煌文書（大英図書館所蔵のスタイン文書）」のマイクロフィルムの紙焼きの注文が殺到し、その焼き付けと確認・点検の仕事でした。スタイン文庫1セット約1万枚を、ムラをなくしたり、濃淡を調整してハッキリ読めるようにしたり。池田先生も1日3時間は点検しておりました。敦煌研究室の全員で点検を行いました。先生がたは点検をしながら、写真を取り出し研究をしておられました。この点検に土肥義和が加わりました。

ここで3年前に亡くなった主人（土肥義和）について触れておきます。当時、マイクロフィルムの指導をしていた田川孝三先生のお世話で土肥義和と結婚しました。その頃の土肥は敦煌文献に魅せられて「月謝を払ってでも、ここで勉強がしたい」と言っておりまして。土肥は文庫の先生がた、さらに日本史の坂本太郎先生から文書の年代決定についての助言をいただき、可能な限り世界各国に散らばっている敦煌文献、文書を実見し手抄していきました。私もできるだけついていき、その価値を知りました。

土肥の没後、手抄したノート等はすべて東洋文庫に寄贈し、その整理を研究班でしていただいています。また研究班の若い研究者たち（石田勇作、速水大、十時淳一、宇都宮美生諸氏）が、土肥の論文を一冊にまとめて『焔煌文書の研究』として出版してくださいました。生前には間に合いませんでしたが、天上の土肥がどんなに喜んでいただこうでしょう。感謝の気持ちを込めて触れさせていただきます。

私は文庫のユネスコに異動しました。そのユネスコで数年、国際会議などの手伝いをしました。とても楽しかったのですが、もう少し勉強がしたいと思い、東洋文庫を退職し、お茶の水女子大学の修士課程に入りました。そうしたら長女が生まれたんです。

妻として母として、 また研究者としてあり続けたころ

子育てと研究とを両立させることの苦勞や工夫など、おうかがいできますか？

今なら何でもないことですが、そのころは大変でした。修士課程は3年かかりました。今は保育園があり

ますけど、当時は少なく、しかも親が学生だとダメでした。お金を払って見てもらうしかなかったです。自分は勉強不足だし、わが子の世話がしたくてもできなくて、修士に入らなければ良かった、修士論文もたいしたものを書けなかったと、後悔の連続でした。

子育てをしながらの研究は、コツがあるんです。とにかく、子どもが寝たら30秒以内に机に向かうことです。そのためにはちゃんと資料、ノートを開いて準備しておかなければならない。オギャーと泣いたら世話をするようにしました。夏の朝の5時頃ベビーカーに乗せて散歩する。疲れると寝る。機嫌の良い時に夕食まで作ってしまう。掃除とお洗濯も。寝たらすぐ机に向かう。子どもの生活パターンにあわせました。どうかして時間を作らないと、論文は書けませんから。しかし子どもは病気もしますから、なかなか思うようにはいきません。

二女が生まれたころ、「東洋文庫での仕事があるが」と言ってくださる先生もいましたが、そのためには、8時から6時まで子どもをみてくれるところを探さないといけない。そこで短時間でできる都立高校とか区立中学の講師（定年までやりました）をしながら、勉強をしておりました。そのうちに大学の講師もするようになりまして。ありがたいことに斯波先生からの代講を3年間いただき、私なりに一生懸命勉強をしました。

家庭にいるときは、主人の前でも子どもの前でも自分の勉強や研究はしませんでした。教材研究はするけど、論文を書くような勉強はできませんでした。そうやって区別しないと、女の人はできないんです。電話はかかってくるし、ご飯は炊かなきゃいけないし。自分の勉強や論文は、電車に乗っている時とか、図書館

等、一人になった時にできるのです。どうか時間を作ってやりましたが、若かったからできたと思います。あれから世の中は便利になって女性の地位も高くなって、今は何でもできると思います。女性には羽ばたいてもらいたい。少しでも、荷物を軽くしてあげたいと思います。大きな荷物を背負って、研究と家庭と子育てをするのは、やっぱり重いですよ。

さきほど「後悔の連続」と言いましたが、子どもにたくさん時間をかけてあげられなくて、申し訳ないことをしたという負い目は、いつもありました。後になって、長女が、「私は母が学生るときに生まれたのよ」とうれしそうに友達に話しているのを聞いてほっとしたことを覚えてます。子どもは子どもで生きていくのだと思いました。

育児と非常勤講師とご自身の研究とを十数年も兼ねていらつしやっした後、ヨーロッパに滞在されましたね？

はい。通算2、3年、主人の研究の関係で行きました。初めて1年イギリスに行くとき、榎先生に「絶対、同伴じゃなきゃダメです。お金なら貸してあげます」と言われました。3か月後、決心して同伴で行きました。下の子が小学4年生のときでした。帰るころは英語ができましたけど、通学の時に、現地の子にラッシュの電車のなかで黄色人種故にいじめられました。上の子は中学生でしたから、英語ができなくても、みんなと一緒に遊べたのでなんとか耐えました。下の子は黙って耐える子だから、円形脱毛症になったり、熱を出したり。今思うと、言葉はできないし、外交的ではないので海外生活に耐えられなかったんだと思います。

だから、フランスでは、2か月くらい学校に行かずに遊ばせました。「パードン」、「メルシ」とアン、ツウ、

ツルだけ覚えさせて、お金を少し渡しておいて日中どこか遊びに行かせました。あるとき「今日、どこに行ったの？」ときいたら、ルーブル博物館に誰かの後ろにくっついて入って遊んだと言っていました。前に暮らしたイギリスはただで入れますから。海外は、季節の良い時にお金を持って旅行するから楽しいのであって、そこで生活するとなると大変です。「いいわね」とみんなに言われましたが「はあはあ」と言うだけです。苦勞のほうが多かったです。

その後、ロシアのサンクトペテルブルクに行くことになったら、「またあ？」と子どもたちに言われました。今ウクライナで大変ですが、トルストイ、ドストエフスキーを生んだ国です。平和に解決できないものかと懸念しております。一般のロシア人は親日で心豊かな人が多いのですが。

東洋文庫の研究会で勉強を続けてから現在まで

イギリスから帰国した後は、東洋文庫で中嶋敏先生が主宰されていた『宋史選挙志』を読む研究会に入っていたきました。中嶋先生は修士の時、ゼミで2年間お世話になりましたから。それから中嶋先生の分担の『宋史食貨志』の訳注の手伝いをし、斯波先生が担当された「互市舶」のお手伝いをし、随分勉強させていただきました。

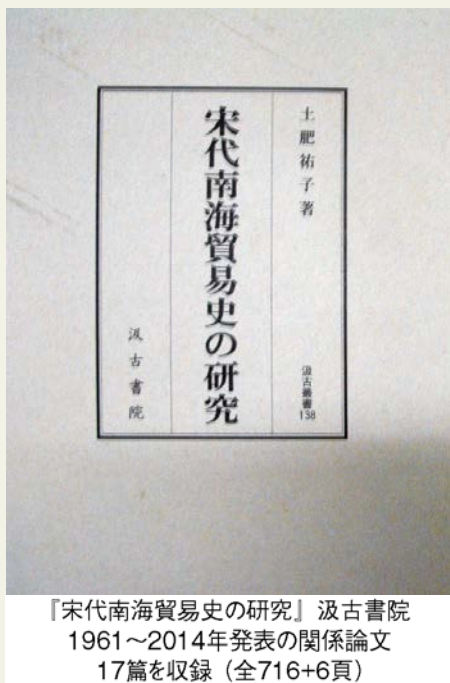
中嶋先生の研究会では、分からない資料が出てくる。みんなも分からなくて、とことんまで討議して、それでも分からない。そうした共通した辛さを体験しました。中嶋先生は結果的に読んでしまわれるのだから、すごいとしか言いようがない。私は文庫の研究会などで

育てられたと思っております。

谷家・神田信夫先生の『歴代宝案』を読むゼミで、祐子先生とはじめてお会いしましたよね。

そうですね。実はあの時、神田先生の宝案の原稿をお手伝いしていたのです。それでも少し根本的に勉強しなければならぬと思ひゼミにもぐらせていただいたのです。明大の博士課程の学生さんはよく読めますよね。あんな難しい外交文書を。3年やったかしら。読めたピカ一は谷家さんでした。

そのころ、私は50ぐらいになってたでしょ。腰を据えて勉強したのは50歳になってからですよ。南島史学会で松浦章先生が勉強しなさいと励ましてくれたのはとてもありがたかった。その後、その博士論文を提出し学位をいただきました。卒業の時、歳をとっていた



『宋代南海貿易史の研究』汲古書院
1961～2014年発表の関係論文
17篇を収録(全716+6頁)

ので、代表で答辞を読み、すこしでも社会に還元したいと言ったことを覚えてます。そしてこれを出版したのが『宋代南海貿易史の研究』です。70歳過ぎてました。これはいした本でもないけれど、女性の社会人で研究をしている方から、勇気をもらったとか、私もこれから勉強するわ、本当は私もやりたかったの

よ」という声の方々から聞こえてきました。その時、日本には多くの女性の潜在的なパワーが満ちている、と思いました。そういう人たちの縁の下の力持ちになれるのならホントに嬉しいのです。女の人が勉強しようとするときの火付け役になっているのだったら嬉しいです。心から応援したいです。

谷家・いまは訳注を担当されている『三台万用正宗』も研究会でブラッシュアップされてるそうですね？

もう、4、5年やっています。斯波義信先生が中心になってやっています。『三台万用』という日用類書なんですけど、一般の人達、基層社会がどのように感知し、動いていたかっていうのを知るために、分担して翻訳に取り組んでいます。私の担当は医薬関係なのですが、力不足で読めないですね。原文を入力して、訓読して、わからない言葉を調べて注をつけて、それから現代語訳にする。皆さんから色々教えてもらってやっています。間違いを指摘されたり、訂正されたり、ありがたいと思っております。

かつて、榎先生が「日本には、国立でなく民間の研究所は、東洋文庫だけだ、そのためにも頑張らなければならぬ」（今は沢山ある）と言われた意味が今になって分かる気がする。大学を退官された先生がたが勉強したり、みなさんが集まって研究会等をしてる。本もあるし。なかなかそういう所はない。財政難のときも歴代の理事長、先生がたが苦勞されて守り続けてきたんじゃないかしら。我々夫婦も50年も60年もお世話になり、育てていただいたのだから東洋文庫には感謝しかありません。

——貴重なお話を、ありがとうございます。

7階の宋代史研究班の机上にて（2022年12月撮影）

